社報
高縄
平成28年2月号
愛媛県松山市宮内甲102
高縄神社社務所

祭事予定（二月、三月）

朔日祭　二月一日（月曜日）午前七時　始式
節分祈祷星祭　二月三日（水曜日）夕刻斎行
紀元祭　二月十一日（木曜日、祝日）
午前九時三十分始式
境内稲荷神社初午祭　同日　午前十時過始式
月次祭　二月十五日（月曜日）午前七時始式
祈年祭当日祭　二月十七日（水曜日）
午前七時始式
朔日祭　三月一日（火曜日）　午前七時始式
月次祭　三月十五日（火曜日）　午前七時始式
春季皇霊祭遥拝・春分祭・十六王子社祭・祖霊社祭　三月二十日（日曜日、祝日）
午前七時始式

奉燈料（一口二千円）献納者芳名（五十音順）

◎猪野蛍光堂様
◎株式会社森水産様
◎菊地雅和様
◎忽那本店様
◎このしまストア様
◎サンエース南店様
◎JAえひめ中央河野支所様
◎匿名希望者様（九人）
◎登佐屋上町様
◎夏目区様（五口）
◎フジ夏目店様
◎富士吹付商会様
◎山本クリーニング店様
◎有限会社イヨデン本店様
◎有限会社西岡兄弟塗装店様
◎有限会社ビバたかいち・サラダ館風早店様
◎有限会社山本金物建材様
◎渡部クリーニング店様

ありがとうございました。

（寄稿転載）

〝高縄中学〟ここが全ての始まりだった

堀井郁夫

ここに一つの御守り袋がある。〝高縄神社〟のものである。母から頂いたもので、それは私が十八歳のとき大学へと故郷を離れる時に黙ってそっと手渡してくれたものである。あの結構よく弁解がましく語る母が何も言わなかったのを妙によく覚えている。この御守り袋の裏に、ある紋様がある。〝縮み三文字〟と私の記憶にあり、それは河野小学校の校章と同じである。〝河野の流れ汲める身は、瀬戸の浦波語らずや。縮み三文字の旗影に・・・〟うろ覚えの河野小学校の校歌が混沌とした記憶の中で蘇る。前後の関係も意味も恐らく少し間違っているに違いないが、ただあの辺りの一族の流れが河野一派に関連した村上水軍に関わっていたのであろうと今は薄々感じている。この事は、故郷を離れてしばらくして気が付いたのであるが、河野小学校の校章と村上水軍の旗は何と〝縮み三文字〟で同一であった事に端を発するのである。当時の私の日記の中の記録にこのような一文がある。「私の父、堀井与三郎も元々舟乗りだった。これも善しとする波瀾万丈の人生があったに違いない。海賊の末裔だとしてもロマンがあって良いではないか。」〝高縄〟と言う言葉からこのような河野小学校から連続して過ごした高縄中学が切り離せないものとして思い出されてくる。私の人生にとってこの高縄中学の三年間は何だったのだろうか？・・・と、私は、この年になり大変な事に気が付いて愕然とするとともに、とても良い時代を過ごしていたのに嬉しささえ覚える。この時代に今の自分の根本的な生き様・考え方の殆どが形成されていたのである。ただ一つ挫折という大変な事象を除いて（これは高校時代、大学時代、その後の時代に厭というほど味わったのであるが・・・）・・・自信・希望・勇気の源がここから発していたと思える。今から思えばこの凝集した三年間に勉学もさることながら田舎者ではあったがそれまで接していない分野の本を読む事、ブラスバンドを通じて音楽の世界を深く知る事などとても真面目で誠実に全力で目の前の対象に挑戦していた事に、今、気が付いた。自分の周りには、先生が・・・友達が・・・両親が・・・兄弟が・・・近所の人が・・・一人の人間の形成にこれ程バラン

スのとれていた環境はこれまでもなかったような気がする。決して広くはない狭い環境ではあるが色々の刺激を受けて〝何事にも一生懸命で全力でぶつかる〟自分がこの時代に形成されていたのである。決して閉鎖された環境ではなく極めて自由な少年時代が過ごせたのである。豆腐屋の五人兄弟の三男坊で毎朝六時に起き豆腐配達をしてから毎日の学校生活が始まっているのが常であり、そこから一区切りついてからという気持ちで学校に行っていたという記憶がある。〝これも善し〟と決められる自分がそこにあったのも鮮明に認識しているし、良い加減かもしれないがこのほど好いバランス感覚は間違いなくこの高縄中学時代に築かれたものであった。言い換えれば先生も友達も兄弟も親もその時ある現状を素直に甘受し一つの共同体として無理なく私を育ててくれていた事にとても感謝している。一つ一つの出来事を挙げれば限りがないが・・・堀本先生、砂田先生、・・・水野君、高野君、牧野君、古窪君・・・中川の均さん、山崎の郁ちゃん、西山の幸宏ちゃん・・・（人の名前を挙げればきりがない・・・唯、女性の名前はここに敢えて挙げないようにするが・・・・）皆さん私の師でありライバルであり、友達であり、これらの人との接触の中から自分という者がしっかりと形成されたものと思えてしかたがない。自分は今日の今日まで晩成型と信じていたが、今思うに〝全ては高縄中学に始まった〟と言うのが正しくて賢明な解析であろうと思う。

この原稿を書くにあたり、懐古する事に新たな発見があることに気がついている。

ちなみに、今、私はこの年五十歳にして遠く英国のケンブリッジ大学で研究生活を送っている。

○　○　○

（本稿は、『北条南中学校五十年のあゆみ』から、筆者ご本人と発行元のお許しを得て転載しました。筆者である堀井郁夫氏は現在、横浜市在住で、英国ケンブリッジ大学・中国大連大学・東京理科大学・昭和大学の客員教授として活躍しておられます）

【温故知新】

今年は閏（うるう）年です。当神社では、祭典の始めに「開闢（かいびゃく）」という曲目の太鼓を打つことになっており、冒頭（枕という）は平年で十二回、閏年には十三回の連打をします。これは、年間の月数をかたどったもので、平年は十二ヵ月、閏年は十三ヵ月であった旧暦の名残です。

そもそも

時間というものは、現在では光の速度を基準に、空間・質量・エネルギーと相関関係にある（相対性理論）と考えます。現代地球人が共有しているのはセシウム原子の振動9,192,631,770回を一秒とする国際協定だそうです。

昔は、昼夜の巡りと日の出から日没までの太陽の位置で日時を知り、季節の移ろいと月の満ち欠けで年月を知りました。

イスラム暦は太陰暦

月の満ち欠けにもとづくのが太陰暦です。新月（朔）に始まって満月（望）で折り返し回帰するのを朔望月といい、時間は現代の計測で29日12時間44分2秒8になります。イスラム暦というのは、この朔望月による純然たる太陰暦だそうです。

わが国の旧暦は太陰太陽暦

太陽暦は地球が太陽の周りを一公転する（観測上は太陽が天球の黄道を一周する）のを一年と定めて基準としたものです。

わが国の旧暦は太陽暦により二十四節気を設け、立春の頃を年始と定めて、これに太陰暦の朔望月を割り当てたものです。そうすると、十二ヵ月は一年に足りません。そこで蓄積された誤差を修正するため数年に一度、閏月を設けて一年を十三ヵ月としたのが旧暦の閏年です。

新暦はキリスト教暦？

わが国では旧暦の明治五年十二月三日を、新暦の明治六年一月一日としました。新暦は太陽暦であり、西洋のグレゴリオ暦と軌を一にするものです。

グレゴリオ暦は、教皇グレゴリウス十三世が旧来のユリウス暦を改定したもので、宗教的理由による（復活祭が夏にずれ込むのを防ぐため閏年を減らす）ので、対立する東方教会系の帝政ロシアは二十世紀に革命で亡びるまで、採用しませんでした。

わが国はキリスト教国ではありません。ですから閏年にしても教皇でなく天皇様の勅令によります。

「明治三十一年勅令第九十号『閏年ニ関スル件』神武天皇即位紀元年数ノ四ヲ以テ整除シ得ヘキ年ヲ閏年トス但シ紀元年数ヨリ六百六十ヲ減シテ百ヲ以テ整除シ得ヘキモノノ中更ニ四ヲ以テ商ヲ整除シ得サル年ハ平年トス」